

五分咲きも

山田真砂年

巢作りの藁上枝より風ほっえに散り

猪口ほどの富士見ゆる丘堇咲く

勾玉の淡き光や春愁ひ

風そより閻魔堂より春シヨール

ムスカリといふむらさきや立子の忌

轉りのかくも忙しく高らかに

神鏡に我が身の映りうらけし

ひやひやと青磁の空や木の芽張る

耕人をけぶらすほどの雨来たり

禅僧のつむり尖らせ蝶の昼

残雪に雲の影ある浅間かな

力石押せばぐらりと暖かし

一木の根こそぎ流れ雪解川

春泥の日向てらてらしてゐたり

春や春襠褌干さるる山の家

富士見ゆる浜に散りをり桜貝

美味さうな木々の新芽や朝が来て

五分咲きも万朶の花も虚子忌かな

花筏とうとうたらりと夕べくる

よき日かなどこ歩きても花の屑

薇のジュラ紀のごとき葉をひろぐ

一人静まこと無口で無関心

茶畠に黄金光りや大薬缶

轉りのいま風上に移りけり

うららかや亀のじたばた泳ぎをる